

令和5年9・10月号(305号)
(皇紀2683年) 毎月1日発行

新風

編集人 川畑賢一

発行人 魚谷哲央
年間購読料 2,000円

維新政党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
<https://shimpu.jpn.org/>
otayori@shimpu.jpn.org

南モンゴルにとっての大東亜戦争

南モンゴル・クリルタイ副会長
オルホド・ダイチン



大東亜戦争は、日本の近代史にとつて最も重要な出来事であり、今も様々な立場からの議論があることは私も理解してゐる。しかし、私たちモンゴル、特に南モンゴル(中国政府の言ふ内モンゴル自治区)の歴史は、日本の近現代史と密接に関連してゐる。私はあくまで、今独立を奪はれ中国政府の植民地下に置かれてゐる南モンゴル人の一人として、日本の近現代史と大東亜戦争が私たちとどう関連してゐるか述べたいと思ふ。

大日本帝国への期待

モンゴル民族の近代史

発足

は、何よりも、中国(当時は清国)とロシア、この二つの大国の支配から脱し、民族の自決と独立を果たすことを目的としてゐた。その過程で、モンゴル人が最も頼りにしたのが、当時の大日本帝国だった。

明治時代の日清・日露戦争において、モンゴル人は積極的に日本軍に協力した。その後、モンゴルにとつて大きな独立のチャンスが訪れたのは、辛亥革命による清帝国の滅亡と中華民国の建国だった。この時、一時的とはいへモンゴルは独立を果たしてゐる。

この時期、モンゴル人は日本軍とも、また、日本のアジア主義の志士たちとも連帯し、独立のために様々な努力を続けてきた。しかし結局、ソ連の影響下で建国されたモンゴル人民共和国と、中国に併合されたままの南モンゴルに、モンゴルは分断されることになった。事実上、この民族分断は現在も続いてゐる。

モンゴル人のための軍事訓練と教育学校

モンゴル人にとつて、独立には至らなかつたが、大きな近代化のチャンスがやつてきたのは、日本による満州国建国だった。一九三二年日本軍の軍事顧問のもと、モンゴル人青年による興安南警備軍が編成され、一九三二年七月には興安軍学校が開設された。これはモンゴル人に近代的な軍事訓練や様々な近代教育を行ふための学校である。言葉も習慣も違ふ中国人とモンゴル人を同じ学校で教育するのは無理との判断もあり、この学校では、モンゴル語と日本語が教育言語として使はれた。しかもこの学校の校長はモンゴル人であり、モンゴル民族の復興と高等教育、今後のモンゴル人の民族指導者を輩出することが目的だった。この学校がモンゴル人に与へた影響と誇りは計り知れない。この学校は一九三九年一〇月、陸軍興安学校に改称された。

戦にも参戦するとともに、一九三八年には、共産党軍の熱河省境進出に對し興安のモンゴル騎兵が出動、何度も共産党軍を撃破してゐる。一九三九年のノモンハン事件の際も、モンゴルの部隊は数千人が参加してゐる。指揮してゐる日本軍士官も、そしてモンゴル兵も多く戦死したことも、私は日本人に是非訴へておきたい。

大東亜戦争の時期は、モンゴル兵が戦場に直接派遣されたわけではない。だが、このモンゴル軍、特にモンゴル騎兵の訓練は充実したものになった。モンゴル騎兵は日本刀を戦闘用に使ひ、剣道を学び、ここ日本でも訓練を行つてゐる。そして彼らは日本語も、中国語も話すことができ、近代的な教育を受けたエリート軍人でもあつた。もしも大東亜戦争後、満州がそのまま維持されてゐたら、モンゴル人たちはさらに多くを学び、満州国政府に對し、自律的な独立を訴へることになったかもしれない。

終戦後、モンゴル人の意思は無視

しかし、現実の歴史はその方向には進まなかつた。

日本が大東亜戦争に敗れ、満州国が崩壊することによつて、モンゴル人たちは再び独立を目指したが、ヤルタ協定によつて、モンゴル人民共和国はそのままソ連の衛星国として独立し、南モンゴルは中華民国にすべて併合されることになった。これは、モンゴル人たちが一人もいない会議で、当時の連合国指導者が勝手に民族の運命を決めてしまつたものだ。もしも連合国が東京裁判で主張したやうに、第二次世界大戦が民主主義と独裁との戦ひだつたといふのなら、なぜこの時、私たちモンゴル人の声は全く無視されたのだらうか。

もちろん、モンゴル人の側にも問題はなかつたわけではない。この時、モンゴルの側にも、共産主義を信じ、ソ連型の民族連邦国家を目指す知識人たちが(多くモスクワや延安で教育を受けて送り込まれてきてゐた)存在し、彼らはむしろ中国共産党に近い立場だつた。日本軍が鍛へ上げたモンゴル騎兵部隊は、中国共産党の指揮下で国内戦を闘ふことになる。

一九四九年の中華人民共和国建国後、北京の天安

新風驟雨

しんぶうしゅう
令和七年開催予定の大阪万博の準備が大幅に遅れてをり、延期や中止論の声が上がつてゐる中で、岸田首相が国家行事として全面的に後援する旨を強調した。▼地盤沈下を続けてゐる関西経済への気付け薬的效果が期待されてゐるが、昭和四十五年の大阪万博と比して国民の期待感・注目度は低調である。▼昭和四十五年の万博を思ひ返すと、戦後日本の文明的一大画期とも称してよい意義が良くも悪くも存在した。会場を包むそれまでとは異質な光と音が織りなす一大空間が徐々にもたらすであらう日本社会の変容・変質を予感させるものがあつた。多くの国民が全国各地から参加して時代の急速な変転を目の当たりにして各地に帰参した。▼その後の高度経済成長はわが国を一大経済大国へと押し上げたが、同時に、敗戦後、主権国家としての矜持を占領政策によつて骨抜きにされてゐたわが日本は、ひたすら経済至上路線に居直つて新たな産業社会への移行を重ねて行くのである。もはや文明社会としての後戻りの利かない世界へと。▼筆者は、この万博会場の雑踏の中で、皇室の在り様が大きく変容して行くであらうことを自覚した。同年十一月二十五日、三島由紀夫・森田必勝両烈士の市ヶ谷台蹶起の自刃で昭和四十五年は幕を降ろした。(谷)

本紙目次

- 一頁：南モンゴルにとつての大東亜戦争
- 二頁：新風ニュース他

(二面へ続く)